

子宮がん検診（施設）

動 向

平成13年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん16,048名（前年度比333名増）、体がん2,889名（前年度比336名の増）であった。これまで減少傾向にあった受診者数は平成10年度に底打ちし、ここ数年微増傾向にある。

健康保健組合の財政逼迫による主婦検診事業の縮小や受診者負担金の増大など、婦人科検診を受診する環境は悪くなってきており、これに対して当協会では個人に対する受診勧奨を継続的に行なってきた。

平成13年度で注目されるのは、20歳代の受診者が倍増していることである。ここ数年の20歳代の女性受診者は100名に満たなかったが、平成13年度は20歳代全体で前年比約2.5倍の224名（うち初診は前年比2.7倍の192名）となっている。増加の原因のひとつとして、某タレントの子宮がん告白などメディアの影響もあるのではないかと推測される。この現象を一過性のものにしたために、ともすれば婦人科検診に対して不安や抵抗を感じがちな多くの女性が安心して受診できるための環境を更に整備していかねばならない。

子宮頸がん検診

平成13年度の子宮頸がん検診受診者数は16,048名、前年度より333名増であった。このうち初診者数は3,835名（23.9%）であって、昨年度より1.8%の増であった。

年齢階級別に総受診者数に対する割合をみると、50歳代が6,042名（37.6%）で相変わらず最も多いが、20歳代が224名（前年度91名）で133名増、その内初診が192名（前年度71名）で121名増と著しい伸びを示した。30歳代でも総数では2,146名（前年度2,136名）で10名増であったが、初診は1,082名（前年度919名）で163名増、率にして18%増であった。がんの若年化傾向が指摘される中、若年者への受診勧奨の努力が反映して若い年代層に受診習慣が定着してきた顕れなら幸である。

細胞診クラス a以上のものは141名で受診者の0.9%にみられ約倍増を示した。

頸がん発見数は15名（前年度15名）、発見率0.09%（前年度0.10%）で変化はみられなかった。内訳は、クラス aから頸がん0期1名、クラス bから頸がん0期5名、クラス cから頸がん0期6名、クラスVから頸がん

0期2名、a期1名で、いずれも初期がんであった。この他、クラス c再検としたもの77名であるが今年度これからのがん発見はなかった。

異形成発見数は92名（前年度35名）、発見率0.57%（前年度0.2%）で著しい増加を示した。内訳は、軽度異形成69名、中等度異形成20名、高度異形成3名であって軽度異形成、中等度異形成の増加が著しかった。細胞診成績からはクラス aから73名、クラス bから5名が発見されているが、クラス cから高度異形成1名、クラス c再検とした77名から13名の異形成が発見された。

子宮体がん検診

子宮頸がん検診受診者のうち子宮体がん検診をうけたものは2,889名（前年度2,553名）で頸がん受診者の18.0%を占め徐々に増加している。体がん検診対象者の選び方は、老人保健法による健診診査マニュアルに準拠しているが、健康保険組合によって対応は異なっている。2,889名の対象者のうち頸管狭窄などの理由で吸引チューブが挿入できず、経腔超音波法による内膜厚測定に変更したもの（採取不能例）126名（4.4%）を除いては増淵式吸引法による内膜細胞診を施行した。

内膜細胞診の結果、疑陽性8名、陽性0名が検出され、疑陽性8名の精検の結果、早期体がん1名、内膜増殖症0名が発見された。内膜の萎縮、出血等の原因で細胞採取量が不十分のため判定不能となったものは101例（3.7%）であった。

卵巣がん検診

一次検診で内診の結果異常を触知したものや希望者に対し、経腔超音波法を主体として腫瘍マーカーを併用した卵巣クリニックを開設している。平成13年度の受診者は219名、卵巣がんの発見はなく卵巣のう腫で他院に紹介したものの3名であった。

関係の集計表は113～115頁に掲載